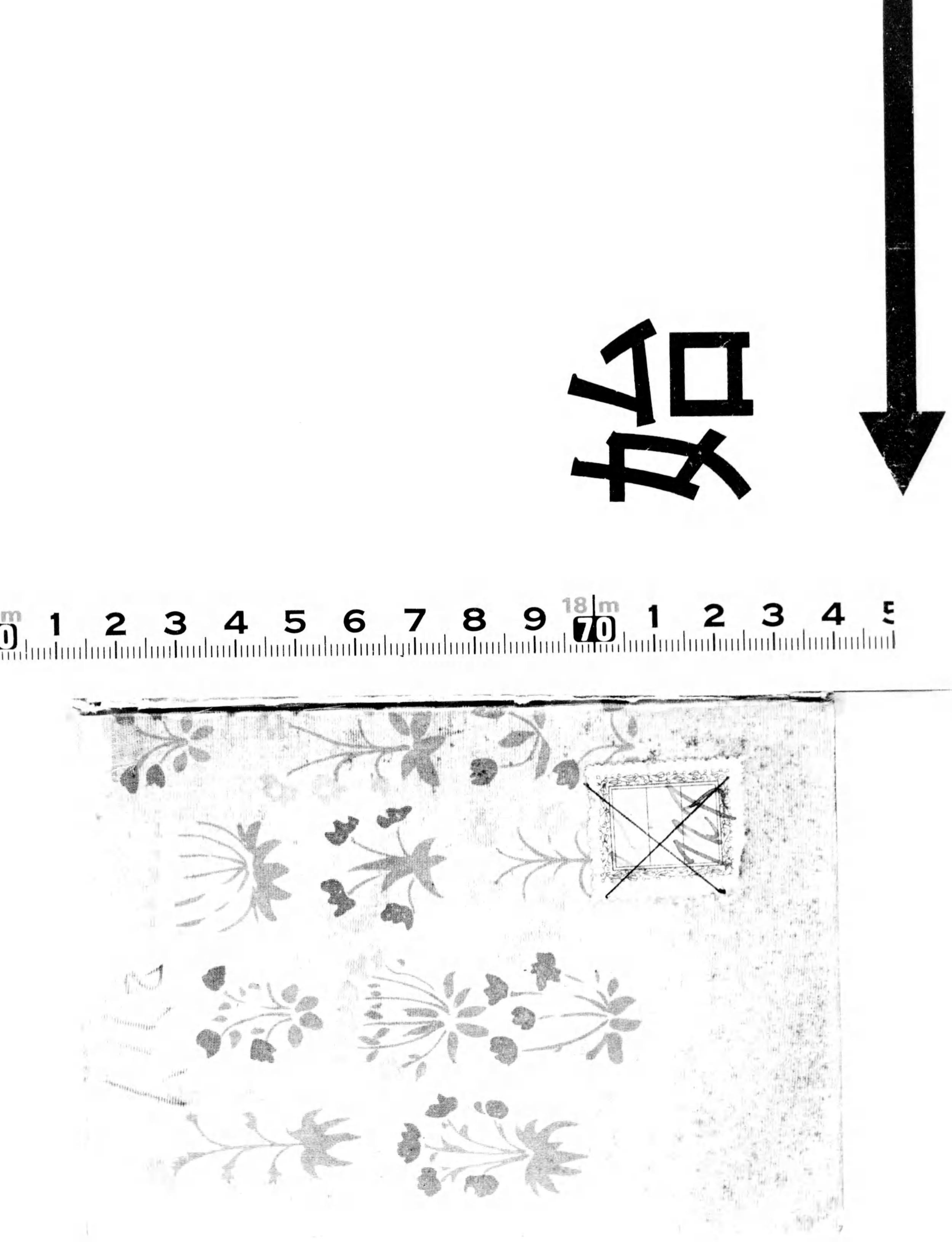


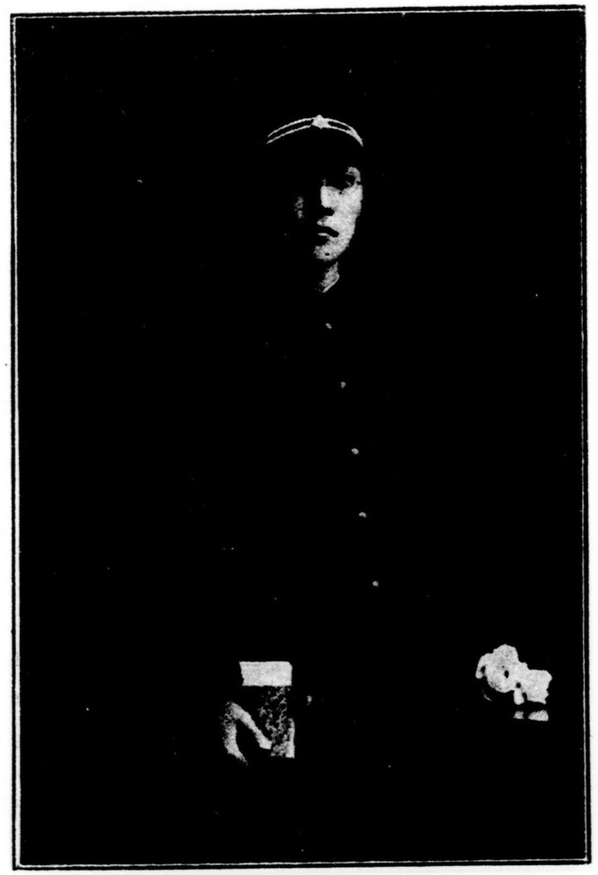
特100
988

詩情抒

# 春の掌合

橋爪健詩集

大正
11.
東京
教文書院
1922



合掌の春時代ノ著者

# 序

橋爪君

自分が一年半に亘る歐羅巴の旅を終へて靜かな蘆屋の舊居に旅裝を解いて間も無く手にしたのは君の『詩集』であつた。自分は數年まへ一高詩會の席上で初めて君を見た日のことなぞを懷

しく思ひ出しながらそこに輯められた詩章を次々と讀んで行つた。何よりも青春の悅ばしい夢と熱情とが自分の胸を打つた。その健やかで哀歡に充ちた若き日の持つ魅力は自分にはもう逝きかけてゐる午後の日射とも言はるゝものであるだけに、ひとしほに美くしくも懷かしく感ぜられるのであつた。自分は詩が、詩の持つ世界が、夢多き若き日の特權であるこばかりは信じ



てはゐない、むしろ今の自分の心境からすれば若き日のたゞひたすらなる殉情の世界よりもその後の日に來るべき明暗多き觀念（イデ）の世界が更に貴むべきものとさへ考へられる。然し、かゝる觀念（イデ）の世界が如何に貴からうともそれにつゝみまとはる感情（サンチマン）が若き日に見る熾んなる炎のなかに輝やき閃めき燃え得ぬならば、それは冷灰なる哲理以外の何ものでもないであらう。『巴里殉

情調』の作者が曾て自分に書いて送つた音葉を今更のごとくに思ひ出す。『Jeune poeteではなくPoete jeune であれ！』この言葉のこゝろを自分もまた君に贈る。君の持つその青春の熾んなる炎をば永遠のものに鑄造したまへ。夢多きその若さをばピグマリオンのごとくに君の身に刻みこみたまへ。かくてその淨らけき熱情こそはかの南歐のナポリにて見し美くしきキャプリの島



の Grotta Azura のごとくに、そのなかに入り來るあらゆるものを永遠の青さもて耀き染めいだすに違ひない。

君はこの度小曲を一冊にまとめ『合掌の春』の題のもとに上梓せられるといふ。旅の疲れのまだ消えやらぬなかにあつてこれ等の拙しい言葉に深き思ひをこめて君に贈る。

十月二十六日

柳澤　健

# 序詞

われ茲にありし日の殉情の穂を拾ひ、埋れたるものへの回想と未來への翹望のために、この一卷を束ぬ。獻ぐる者の手に涙の匂ありて、指さすものは若き友らの瞳。今は胸せまりて云ひ難し、たゞ贈る吾歳の名によりて。——

一九二一年秋

著者

# 合掌の春 目次

## されど戀は


遠き枝……一
けれど私は戀す永遠に……八
まぼろし……一九
あひゞき三章……二一
1 あかさき……二一
2 まひろ……二三

3かたはれ……二四
春の休のランデイヴアー……二七
胸にかく手紙……三八

## 丘の饗宴

破帽子……四四
丘のまどろみ……四七
勝利……五〇



蠟涙を掌にうけて歌ふ……五三
槍投ぐる男の歌……五八
紀念祭前夜……七〇
Terzine……七九
春筵禮讃賦……八二
三十年紀念祭歌……八六
西寮々歌……九四

## 合掌の春

序曲……一〇五
すべなき合掌……一〇九
春いだくこゝろ……一一七
さゝげし後に……一二一
紀の國坂に與ふる詩……一二五
愛の憎み……一二五



## みどりの家

みどりの家……一四〇
戀の奥津城……一四五
印象……一四七
捧誓……一五一
みどり……一五四
山の驛長……一五七

裏山のおち葉の下に……一六〇
ひそかに見たり……一六一
孤　　獨……一六三

## 故郷に依れる詩篇

空が地上を映すなら……一七一
さゝくれた指(童詩)……一七三
海郷殉情調……一七八



1 なぎさのをとめ……一七八
2 海と處女……一八〇
3 砂山かげ……一八二
4 かなしいプロフアイル……一八五
記　　憶……一九二
歡ばしき祈願……一九七

目　次　終

江戸繪ごよみ

されど愛戀
こそは暗鬱。

——デエメル——

## 遠き枝

父様(とうさま)に盾(たて)ついて
泣きはらし潜びよる
禁斷の
裏の果樹林

けふで七日。

《どこだつたろう、あの樹？
あのぼく大好きな……
樹皮に傷さしこいたから
すぐめつかるよ
あゝこれこれ……》



名もしらぬ乳色の樹
すべやかな
幹に掌をあて
さて、見上げれば
遠いゝ枝に、朱い實が
つぶらに一つ。
《……

きのふよか熟れたもの
……ほしいなあ
なぜだつて父ちやんは
毒があるつてゆつたんだろう……》

透し視る
小枝杳けし



果は一つ。
幹の日向を上りつ下りつ
蟻群の行列。
進軍喇叭のあの聲は
かの顆さしてゆくのやら
《おつきくなりたいなあ早く
あそこへ居くやうに……

だつてもう泣きやしない
大きくなつたら皆みんな
ぼくの臣にしてやるぞ……)

(白午つかれ
跛の園丁の鼾聲)
なれど遠い〻枝の王國



甲蟲は、鎧の纓の皺を伸し
蜻蛉の紅き槍の穂尖。
鵠軍、黄金のプロペラを研ぐ。
蒼穹に浮く
遠い〻枝の幻の女王
衛られて、耀きて
つぶらにひとつ。

## けれど私は戀す永遠に

——幻想の少女にさゝぐ——

"Desto lester sei, bei der allgemeinen Erschutterung,
Dorothea, der Bund!"
——Goethes "Herman u. Dorothea"——

戀びごよ
戀びごよ



強く、靜かに、思ひをこめて私は呼ぶ
胸に呼ぶ、虛空(そら)に呼ぶ、しみじみと
さうしてぢつと耳をかたむける
土をうつ雨。蠟燭のにじむ音。遠いゝ電車の往復(ゆきかひ)
そして自分の吐息——聞えるものはそればかり、

私の魂の呼聲に谺するのは唯物象のひゞき。
けれど私は呼ぶ、一心に、ごんらんに、涙ぐんで呼ぶ。
さうして耳をそばだてる

やがや聞えるそれは、一脈の謐聲
劫初から永遠に流れゆくものゝさゞめき
不可抗な力で私たちを載せ、私たちを引きづり乍ら、



しかも私達には近けない、觸れえないものゝけはひ。
私はしばらくその無明の耀きに醉ひしれる
魂はへり下り、思ひは靖らかに……

『あゝけれど　私の
戀びとよ　戀びとよ』

——愕いて私はさけぶ
空しい魂の戦き、虚ろな情念の歔欷き、
おゝ　われにかへつた私は呼ぶ
つゝましく、肉聲を振りしぼつて呼ぶ——
『戀びとよ
あなたはやつぱり生ける肉身
あらねばならぬ人間の處女！』



かくて肩ふるはせる私の「思ひ」
今は愛しい肉の感觸をかんじつゝ
舞ひおごり、うち伏す幻想のかずかず——
……私の手はかんずる、あなたの垂髪。
……私の唇はかんずる、あなたの豐頰。

……私の眼はみる、あなたの双眸。
……私の耳は醉ふ、あなたの明色(ハイテル)な顫音。
……私の胸はかんずる、あなたのふくよかな乳房。
……さうして心は抱きしめる、あなたの熱いこゝろ。

あゝあゝ、だのに私は知らない現實のあなたを。
あなたはどこに、いつ生きてゐる？



その無知は私は脅かし、俛首(うなだ)れさせる、
おゝけれど、太陽のちからを持つ愛と信、
しほたれた夜明けの草が甦へるやうに
うなだれて瞳を睜(みは)つて、まともに切に私は呼ぶ——

戀びとよ
戀びとよ

あなたはきつと生きてゐる
私の踏むこの地に、私の吸ふこの空に、
そして私のかく生けるこの時限に、
微笑を翳して眞實に、情愁を秘めて愼ましく、
私といふ男性への唯一つの必然をかんじつゝ、
おおあなたよ、あなたは生きて待つてゐる！



生の苦しみ哀しみ、いらだち、憎しみ、
迷ひつかれ、もだへ倦じた私の魂と肉。
けれど私は戀す永遠に
明眸の星をめあてに
いつかは訪れるだろう「或る日」のために
あなたと私との神の指令に手をひかれて
地上と萬人への愛のために

泣きぬれて呼びかはしながら
つきず　つきず　私は戀す
永遠の　處女の　肉心！



## まぼろし

すなはらたごる
わな〻くわがたましひをうちて
よきはおごぞすなる
おそれてふりあふぎしたまゆら……

ひとつかけりゆけり
ちゝいろのうみのとり
そは、あるひとのひとみのまさをに
ひろごりひろごりやまざる
わたつみの
ひとつのまほろし



## あびゞき三章

### 一　あかつき

茂りをすかせごゆくて判なく
うちまかせつゝはつかにたどる
樹々にもつるゝ森のほそ徑

双つの肩しかこいだきあへど
足は草に濡るゝよあかこきなれば
あるかなしの風ぬき蹠にめぐり
ふたりの胸内の愛の嫩葉
つゝましくもそよぎかはす
かなた明ければひがしならむ
いざ君よ歌を——



## 2 まひる

あきつの影ゆるくすべり
のぞく海のしら帆たゆめり
まひるまどろむ砂やまのかげ
すがり零るゝふたりのことばは
まだして熱き砂にいきづき

かげらふほのほのとあがれり
うちふせる君がましろき指
ゆるがすなかれ砂はほぐれむ
うつゝなくまぶたするこゝろ
いざ君よ眠りを——

## 8 か詠た れ



知らずいづくよりか寄りそひし
たそがれこふたつのかげ
ぎんの流れにむすぼれあひつ
舟はくだるわがおす櫂に
はぬる水音をけしゆくふな脚
あゝいま灯と人こは遠しあなた
弓空のもこ水の上いのちふたつのみ

わきては盈つる闇にとけゆく
星まばたくそら月はいまだ
いざきみよ唇を——



## 春の林のランデヴアー

五月！　あゝ五月！　いつかめぐつてきた爾の眼ざし
よ、果てしない幻の、その領の、霧にうるんだ爾の瞳
もと！　いつものやうに、はだけておくれ爾の胸を！
健康にしなやかな、爾の双腕に抱かれるとき、搖られ

るとき、饒かな爾の愛情は、濃い欣びと感傷のしたゝ
りに、若者たちの頰と處女たちの唇を、まあなんて紅
く艶やかに染め出すだろう……

私はちつとも氣づかないでゐた
おまへのしとやかな足どりを
さうして、ゆく日くる日に



好ましいこゝの林にねころんでた
ぼんやり空をながめてゐた

——ある日、私は氣がついた、私の林が光に綠にゆ
らぎほゝゑむ……あゝそのゆらぎ、その微笑を、五月
よ、爾でなくて誰が私の林に與へよう！　あゝ今涙ぐ
んで心はおどる、血は滲み渡る、おゝおゝ、今は私の

五月！　私の林！　待たれた嬉しい邂逅(めぐりあひ)よ、さあ握手(て)を！　ね、あなた！

（ある日っ若い二人(ふたり)は謀(しの)しあはせて、おの〻き乍ら近づいた、林の奥へ。そしたら大きな柔かい腕のけはひが、ふいに二人を抱きしめた。――男は歌ふ――）



ゆらめく若葉の光を徹して
はるかの地平をわたしは見る
涯なくひゐごる麥畑に
みどりの陽炎は息づきふくらみ
朱い並樹路(プロメナーデ)のしなやかな見えがくれ！
その優しい曲線(カーブ)がむつまじく
蠟色洋館のかげで切る明い十字！

思ひに濡れて私は眺める、愛するひとよ！
私の憧憬(あこがれ)は永遠へ、處女(おとめ)へ……
あゝ今見たまへ、青春の祭壇に充ち零れる
愛よ、詩よ、耀きよ、
祈願(いのり)よ、奉誓(ちかひ)よ、なみだよ！
ひとりの君よ、手を借したまへ
私の若い黒瞳に、「無窮の眸」を注ぎ給へ



氓びゞ傲りを知らぬ「地上の愛」をつぎ給へ
そして貴孃(あなた)の純潔とと無邪(あどけな)さもて潤し給へ
あゝ、五月の微風(そよかぜ)はわたる
若やかな緑は匂ふ
つゝましい詠讃の韻律(リズム)にこけて
あゝ　いま　さゞめく戰く　生の萬家！

——何がこんなに私の魂をころかすのだろう、おゝ
雲雀よ！　夢の間唱(リトルネル)の無邪氣な歌ひ手よ
乳色の雲の彼方！　若き日の郷愁(ノスタルヂア)が噴(ふ)き流れる
小鳥よ歌へ、私は嫩芽(わかめ)を摘み乍ら口笛を鳴らす
落ちたわか芽は人間の小指のやうに
やはらかな濕地の面をうごめき
向ふの小徑(こみち)に振り返る明色(ブロンド)の二人の處女！



——愛するひとよ
樹々の掌(たなごころ)の白い滴汁(したり)を手にとりたまへ
うら若いいのちの息が燃えるではないか！
——愛するひとよ
遠く狹(せば)まりゆく木々の茂りをすかし見たまへ
樂しい追憶と豫想とが、何とふくよかに紡がれて！

——愛するひとよ

私の胸にそつと耳をあてたまへ

おじようろ蜘蛛の素絹の網が顫へるやうに、ほら！

（葉もれ陽の班らなときめき

かなたの杜はいま翳る

快よい疲勞に

ゆるやかな雲の脚を見上げる二人——。）

——1919.5.1——

## 胸にかく手紙

ひとの目に
觸るゝ差らひ
けふも訪ひくる
楡林(にれはやし)。



楡林
樹々を千廻(ちめぐり)
ひとりさまよひ
解く卷紙(とかんがみ)

解く手紙

千尋八千尋
思ひ告げ得で
秘めをきし

秘めをきし
胸の文字々々
樹々にもつれて



いくめぐり

幾廻り
縋れど君の
こゝろは遠く
日は昏るゝ

日は昏るゝ
栗鼠に哂はれ
また卷き歸る
胸の戀文。



# 丘の饗宴

## 破帽子

去りゆく丘に
けふもきて
草に埋(うも)れつ
日を數ふ

三年冠りし
破帽子
庇を頬にし
春かぞふ

涙泌みたる



鞣裏
書かれて消えし
名を數ふ

數ふれど
數ふれど
丘は入陽に

唯朱(あか)し

## 丘のまどろみ

夢のやうな
草いきれ

（向陵と去るとき）



草のいきれのやうな
ゆめ……

（ワンストライク、ツーボール！
よし、今度こそはホームランだぞ）

風のやうな
蟲の翅(はね)おと
翅おとのやうな

ゆめ……

《憂！　ワッショイ●ワッショイ！

スリーベースヒット！　駛れ走れ》

雲のやうな

散るはなびら

散るはなびらのやうな

ゆめ……



《おい誰？　ミットなんか抱いて、

ほう、快く氣持にねてゐるぜ……》

—一高校庭にて—

## 勝　利

白旗。たゞ見る白旗。太洋をかける龍卷のやうに、驀

地に燃え躍る白。尾を搏つ白旒。

號叫。泌みいる大鼓。歌に和し、空の碧さして旗より

揉み出る響の渦。覆へる喚聲。

Don-n Don-n Dr-r-r-r Wwwah.....

Don-n Don-n Dr-r-r-r Wwwahh.....



一團。白と叫びの一團。群がり轟く勝利の亂舞。頰と

頰。腕と腕。さし覗く若い瞳。

組あひ縺れる白線帽。交り飛ぶ角帽。霜降と紺の交錯。

振る手。舞ふ足。突如どよめく校歌。

散る。散りしく花。丘の Slope に立ち悚む夕陽の薔薇。

散る櫻。濡れる畔。豐かになびく白旒。

（對校野球戰所見）

## 蠟涙を掌にうけて歌ふ

まつはりつく街の匂ひと色とは執念！
あゝ振り返りがちな私。（しかし夜が、



涙ぐましい力をも、寂寥と共に與へるのを！）
閉じられた門扉。後の世界を見かへりつゝ
それでも強く切に叫んだ私。adieu！
六の寮舍は靜かである、夜とともに。
虚ろにゆれる私の眼は、醉ひたゞれ
おゝ巷の酒に、女の白い指先から。

醉つてゐる。さうして私は歸つてきた。
仰ぎみる三層樓。おゝ私の家なる西寮！

月のない夜空にぢつと動かない、その姿、
巨大な影。振り仰いで私は身をすくめる。
彷徨ひ出たお前の子は今、戻つてきたのに、
何も云つて呉れないお前の姿。無關心な！



默示？あゝ醉ひ痴れた眼にはわからない。

淋しさゆゑに私はお前の懷から逃れでた
そして、淋しさゆゑに再び歸つてきた私。
愛撫は要らない、せめて叱つてくれたなら！
あゝ冷く夜に默したお前。星も動かぬ。
心足らはず推す扉。おお、自修室は空しい！

裏切りの私に甦り、現なく胸かきむしる。
窓に流れよる星。心は祈りに膝まづき
合掌の指に熱きは、友に依る涙か、蠟の雫か、
あゝ揺れるよ、燭はわが掌に、影は友の寝顔に——



## 槍投ぐる男の歌

その名を Javelin といふ。キウピッドの投ぐ
る金の箭もかくや。かなしき人間の手をは
なれて情熱の尾をふるはせつゝ燃ゆる空指
してましぐらに舞ひ、力絶えて落ちむとす

る銀散らばる机にまさぐり得たともしい蠟燭。
闇に翳して私は燐寸をすりつける、
そしてよろめき辿る長い階段。跫音も秘めて、
一段毎に搖れる光。熔けしたゝる蠟涙。
指は熱さを忍びつゝ、はぐれがちに歔欷く思ひ。



ふとも瞥る友の寢顏。こぼれ敷く光に、
おゝ青いその光の縞に、刻みゆらぐ憂はしの翳。
月のない夜は、「彼らの談りあひ」も疲れ速く、
誰こなく眠りそめた歳わかい夢のけはひ、
搖れる搖れる、燭はわが掌に、影は友の寢顏に。
(寂しいのは君も僕も)——晝の言葉は

の穂先、朱陽、りと煌く、まこと男々しく愛(かな)
しき名よ、わがヂヤベリン。

×

さみし白に
片照り丘のかげにきて
ひねもす



槍をなげにけるかも

×

愛憎のちまた離(か)れきて
これやこの野のはてに
ひとり
槍なぐるはも

×

はたとせのいのち剌されこ
おん胸に
空のまともに
槍なげりけり



×

やゝなゝめ
秋ゆく陽あり
槍がつぐ甘歳男(はたちを)とべば
野づらひろしも

×

槍なぐる思ひぞ
かなし
念々にひと戀ふをごこ
うら若きゆえ



×

あまつ空
日子のをれゝば
槍のむだ目蔭をすれご
まぼしきろかも

×

あくがれのこなれゝば
ましぐらに
まともに、ひたに
槍をこそなぐれ



×

わがこめしちから足らはず
槍は落つる
入り陽にあかく
なみだきらひて

×

にんげんの
さがはもかなし
にんげんの涙もてるか
あはれヂャエリン



## 記念祭前夜

『どこへゆくのだろう、あの鳥は？』

わたしは丘の裾にねころんで見守りながら
きえてゆく午(ひる)のつばさを聽いてゐた

ああ　たそがれる丘。

ふともみる枯れた梢に、さゆらぐわくら葉、
風はなくたゞ一つ搖らぐ、ゆらぐ
そうしてそこへも暮いろの侏儒が忍びよる。

あゝわたしは醉ってゐる、暮れゆく日の思ひに。
そして、なんだろう？　もうひとつ……



ときめかしいこの胸の、それはつゝましい歡びの……

Io!　わたしは帽をあげてふりあほぐ
Io!　灯はいまともされた。六寮の横顔！
まばらな上枝をこほしてくるその煌き！

**おゝ今宵**

みちみたされた宵
しめやかにこゝろおごる宵
（今夜だ！）私は歩みよりつゝ唇をふくみ
思ひふかく叫んだ、（記念祭イーヴ！）

『ゆうぐれの星またゝけば
りく寮にてるともしびに



かゞやく瞳うるませて
友もうたへばわれも和し
むねにあふるゝ感げきのな
なみだはほゝをつたふかな』

おお　熾んなしづけさ！
ひめやかなどよめき！

そのあはひから幻の呼聲のやうな歌のテノール
もつれ湧き、からまり消える、泌々しいバス。……

こもされたばかりの自治燈は、朱く、碧く、また黄に、
扉に、窓に、白壁に、みはるかす花の廊に、
若やぐ友らの、包みきれぬをとがひに、
めぐり來たひと夜のさちを。おゝそのにじむ光！



ああ　今宵
待ちあこがれた宵……
あすの祭のうま酒をかもす宵……
それは愛のいのり。又は春を抱きむかへ惜しみよる
若さよ！

友よ語ろう、はてもなくふるへる胸を。
友よ歌はう、ゆゑこなくゆらぐ血しほを。
そして疲れそめた唇には琥珀の酒、今宵は！

——（しづかな宵がゆたかに紡いではほぐらし、ほぐらしては紡ぐ歡びと愛しみ。友を、おとめを、そして若き日の饗宴の、にぎはしい儚なさをおもひつゝ、



私は、ふたゝび丘のほとりに、まだ芽ぶかぬ夜の土に。）——

——三十年記念祭前夜所感——

## Terzine

×

蠟燭をつけたまへ、さみしからずや
ほのぼのと、夜霧に濡れたる若人よ
みごりの炎、涙拭はず啜り泣く憧憬(あくがれ)がちなる炎！



×

秘めやかに、雫(しづく)はほぐるゝ若き日のここごとく
焼きたまへ、うなじにふるふ黄金(きん)の髪
炎は時めき、甘き匂ひは去りし心を甦へらせむ。

×

ゆらめき耀き祈り忍び泣く若き日の焔！
眼眸(まなざし)はなたず瞶め給へ、睜(みは)りし炎の閉づるまで
君が瞳熱くにじまば、消えたる闇にも虹はあらむ。



## 春筵禮讃賦

——壁にゑがきて——

よみがへるはるのけはひの
おほどかにこきめきぬれば

ひや〻けきだい地にそだつ
もろもろのいきのいのちは
もえいぶくひかりのひまゆ
むらがりてわな〻きかはし
おごろきにはたよろこびに
にじみづるなみだぬぐはず
血をゆりておごりゐまひぬ



たまゆらのうれひこそあれ
なだらなる丘のほこりの
にほひてきウリヴのはかげ
みこせ掬むはるのいづみに
フリヂアのさかづき充ちて
なげかひもちゐのまどひも
大地の齢をさ〻やきぬ

ゆみなりのそらに生れいで
旅すがらしましわすれつ
みそとせの祝祭ことほぐ
うらわかきをのこのさちを
つゝましくきみにさゝげむ

（三十年記念祭所感）



## 三十年記念祭寮歌

1

春よみがへるときめきに
もゆる若樹のひかりより
生命のむれはわなゝきて

1

跫音ひめてあゆみよる
新生れし時代の歡びを
盛りてほゝゑむ花籠に
昧爽のいろ君みずや



3

憂悶こそあれたまゆらの
うら若き日の旅すがら
橄欖のかげさまよひし
矜りはこはに忘れじな

4

土の卿愁に堀り入りて
しゞなる懐疑身にしめぐ
愛しく強く肯ひし
これの生にゐる力かな



5

眞理の道の嬰兒が
宇宙の律に瞠りけむ
瞳にやどす耀きを
生命の詩と誰か知る

6

叡智の門扉ば硬うして
魂の夕星はろかなり
秘鑰をすてゝ合掌の
自己に覺めよ自治の友



7

まぼろしおごる青春の
祭の壇湛へけむ
銀觴春はうつろへど
唇につきせぬほのほかな

8

涙ぬぐはずほぐれゆく
金燭のかげ八寮に
十とせ三たびをめぐりこし
うたげの宵のおぼろかな。



## 西寮々歌

1

うら〻にもゆる若草の
春の光にむすぼれて
敷寢にあかきまどろみや

青春の夢うるほへば
神の默示の花ふれて
若人の唇ゑまひあり

2

いくそこゞしき荊棘路を
さまよひにけむけふ茲に



運命を秘めてつゞひこし
星ふる丘の牧の園
かたみにいだく靈と靈
迷羊の胸なみだあり

3

群れさまよへご享樂の

野に永劫の眠りせじ
「いづく」と問はゞ淡緑の
橄欖の鞭ふりかざし
朗らに鳴らせ柏笛
「途遠くして光あり」

4



燃ゆる思情の唐ごろも
かなしき旅人友とわれ
露こき丘に膝伏せて
若き悶えに泣きぬるゝ
聖き祈りの影ほそみ
星兆して流れけり

5

ああ三年こそ人の
世のこよなき祝福ぞ逝く水の
流れ藻の香に追憶づる
おくがれの日を知るや君
命の窓の白壁に



刻りて古りにし名は誰ぞや

6

六つの城べに零れけむ
希望の種ゆ萠えいでし
青史は榮えぬ二十八
燃えてほぐるゝ金燭に

紅き頬の君杯擧げて
さらば歌はむ花莚



# 合掌の春

君こそわ嫁ぎいゆけど
こことはに胸はかの日に

Ich muss ja immer streben
Nach der Blume, wunderhold;
Was bedeutet mein ganzes Leben,
Wenn ich sie nicht lieben sollt?

——Heine——

## 序曲

しづこゝろなくもろびと散りかはし
まつりの日たそがれなやみしころ
そのほのあかるみにきみはありぬ
まこと夜のとばりのさちにはみてる

おもひがちなる若者の双眸はかゞやき
あはれ愛(かな)しくみそめしものを神はしれり
そそとしてたゝずめる君がいのちのめぐり
まこと夜のこばりのさちにはみてる

ああ君たまゆらのおもひとさげすむなかれ



しるや神のつくりたまひし子のまなざし
たまゆらのおのゝきにも杳らなる生命(いのち)を見む
たまゆらの一撞(ひとつき)に魂の鉦とこよに鳴らむ

おゝさだめありせば君よ愛の鞭をこりたまへ
ひつじのごとく膝ふせてわれはうけむ
おゝえにしありせば君よき揺籃(ゆりかご)に眠りたまへ

みどりごを守るしもべのごとくわれは揺らむ。



## すべなき合掌

ぢつと動かない山羊の喉のやうな白い雲
近寄る雲、とける雲、離れゆく離、
向ふの林にからんではほぐれる雲
ほら！今あの洋館の赤い壁をすべり下りて

ものも云はずに畑をいそぐ雲のかげ。

ああ　あほいあほい弓なりのそら
さうして　このはるかな地平
そこに思ひおもひの姿で散らばる雲よ
なぜこの様にとりとめもなく悲しいのか
ぢつとおまへを見てゐるこいふことは？



私は考へる、（寢ころんだこの丘の暖かさ）
片手で頰杖、かた手で草を拯り乍ら
時々おまへを見上げては考へる
考へてもわからない——歌をうたふ
うたつてもわからない。あ！手がかゆいぞ
なんだ、匐ひ上るやはらかな小蟲。

カステラ色のちつぽけな膚の中に
おゝそれでも蟲よ、おまへは生命(いのち)を持つてゐる
あゝ感ずる私は、獨りぼつちの野原で
近よつてきたおまへの小さないのちを。
見かはすいのち、觸れあふいのち。
おゝ今こそは知る、わたしのかなしみ。



戀びと

戀びと！

強いこころ、そして弱いこゝろ
それをあなたは私に下さつた
無智と聰明、誇りと貧しさ
それをあなたは下さつた。
私のむねに今、海をゆく風のやうに
あなたを慕ふ情熱はわきめぐる

けれど海底ふかく漂よふ暗緑の藻草
それを感ずる私のかなしさは！
あゝ欣こんでいゝのか泣いていゝのか
私の心は、風と藻草をもつ海のやうに
ある時は歡喜の浪をあげて笑ふけれども
底の暗間には、沈み澱んだ思ひがある。



私の戀、またはあの合歡の樹にも譬へようか
愛の陽光を浴びて枝をそよがし乍らも
ふと、葉をすぼめて泣きいる時がある。
あゝ私のさし伸す手は悅びなのか
私の曇る額は哀しみばかりなのか
あゝ術もない、今は、たゞ
戀びとよ

あなたの懐(ふところ)につみとられて
すべない祈りに默(もだ)す合掌の
合歡(ねむ)の木の葉よ――わが戀。



## 春いだくこゝろ

かなしきおもひに
ほそりし双頰
かぜあたゝかきは
春のきつるや

あくがれまよひて
野をゆく素足
くさやはらかきは
はるのもゆるや

くちふえふくいき
しろさもうすりて



そらうるほへるは
はるのいぶくや

きみこひあまりて
おりごる嫩(わか)えだ
ちゝ濃くたれるは
はるのとくるや

あゝかくてきみはしらじな
おろかにもわれのみまよひ
たえがてぬむねのいたでに
はるいだくこゝろすべなし



## さゝげし後に

はじめてきみと
ここのはをかはせし
そのたまゆらの
むねをうつよろこび

われはさゝげぬ
ひとつきのかなしき
おもひのかけら
むねをさすかなしみ

きみはほゝゑみ



もののたまひつゝも
つましきみてに
あはれうけたまへり

ああかくてわれ
よろこびとかなしみ
むねにひめつゝ

いまはたゞかへれり

さみしくひこり
かみよいのらしめよ
きみがこゝろに
わがいのちふれよと

（九、三、二七、君が卒業の日）



## 紀の國坂に與ふる詩

美しい名よ、おまへ紀の國坂！
わたしはその日まで知らないでた
おまへのなつかしい名前。
おゝしつくりと想ひだす私は、

ときめに充ちて想ひだす、
初めてその名を知つた時の心の睜りを。
記念祭の夜――さうだ忘れえぬ宵
わたしは幻エリスに連れられて
いゝえ、あのひとのいとほしい瞳に縛られて
雲のやう、糸の切れた風船のやうに
私はおまへのふところに近寄つた。



あゝ其處で、あのひとにはぐれた私が
つめたい夜風に抱きすくめられ
枝にからんだ煙のやうに、凭首れて獨り、
ぽつんと佇つてゐたときに
ふり仰いだ私の眼、涙にぬれたそのひとみ、
あゝそれに、何といふ字が映つたろう？
薄赤い灯の點つた電柱に、私は一氣に讀み下した、

お丶憧憬の名よ、おまへ『紀の國坂』——

今日は春らしいほかほかする日、
學校がへりの鞄のま丶
私は再びお前のおこころに潜びよつた。
『紀の國坂！』車掌は呼ぶ、電車は停まる、
（あ丶幸福な車掌と電車、君達は日に何度この名を呼



び、そして見るだろう！）
うらやみ乍ら私は、それでも樂しく
かわいた地面にぱつと飛び下りる
お丶お前慕はしい土よ、紀の國坂！

あ丶お前も幸福者の仲間。
あのひとに踏まれ、あの踵の高い靴を抱き

さうしてあのひとの嫋かな影をうつすお前！
私はステッキでしみじみお前を撫で乍ら
あちらこちらと探しまはる――
あのひとのちいさな靴あとが刻まれて
なつかしい匂ひが零れてはゐないかと
けれどそれはむなしい望み……
私はお堀の堤草に身を投げて



陰翳の多いゝ向ふの森を眺めながら
淋しさまぎれの口笛を鳴らす
吹いても吹いても私の胸はうなだれる
いくら快活だつて私はせつない
戀しいひとの心がわからないうちは！
あのひとは、紀の國坂よ、きつとお前を愛してる、

紫色の五年の間、彼女に仕へたお前の幸福、
私はそれがうらやましい……
わたしのめめしい嫉み心をゆるしておくれ
おまへ、恵まれた紀の國坂よ！
あゝいつか暮方――今はお前と別れよう、
さあもう、おまへのお隣りの辨慶橋



その欄干にもたれて私は振りかへる
おゝあの黒塀！おつとりしたそのたゝずまひ！
そこに私の唯一人が何も知らずにゐると思ふと！
もうもうさやうならだ、私はかへる、
陽が昃るさやうなら！
いゝ告口をあのひとへ、私のために、
ね、さやうならよ、

もう一度、さやうなら！



## 愛の悩み

きみゆゑに涙たらはず
乾きたるまなこさしぐみ
愛するにくみ今ぞ覺りつゝ
朱きカンナの葩を裂く

きみゆゑに思情(おもひ)たらはず
きづつきし胸をそのまゝ
愛するにくみ今ぞしりつゝ
風うつゝなき砂にふす

きみゆゑに言葉たらはず



噤(つぐ)みたる唇(くち)はむなしく
愛するにくみ今ぞしりつゝ
唄もうたはで海をみる

ああされど
憎みか愛かなべてはわかず
わかれきて

たどいち念にものくるほし。

（沼津の海にて）



# みどりの家

# みどりの家

—A Mlle. A. Hana—

森をぬけて

丘にのぼると

野のはてに

ぼくのすまひ。
春だつたから
みごりの生簀
それをあなたは
目標にした。

みごりの城の王様が



はるばるむかへた
桃いろの妃と
ふたりしてゆく
夢の小徑。
そこにもやつぱし
ぼくらに見えた
みどりの家。

秋がきた

不思議なことに緑の家

夢こいつしょにあとかたもなく……。

春のうちよく

丘の向ふに頬杖ついて

覗いてた雲めがきつと



盗んでつた、

掠(さら)つてつた、ふたりから……。

——大正七年の思ひ出——

## 戀の奥津城

かつて吾に盟ひ輪がねし
を指もて香焚きたまへ
かつて吾にひらきゆるせし
唇つぐみ花挿したまへ



今はすべなく手向せむ
われらが戀のおくつきに

とことはこ契りし戀も
交はす眼に生れしみどりご
うつそみの胸にそだちぬ
ほろびしはひこのさだめか

今はすべなく手向せむ
われらが戀のおくつきに

葬火(ほふり)は朱く燃ゆれど
ありし日の夢より昏(くら)し
手に移る泪はあれど
きその日の情(こころ)に泌(し)まず



すべなし今は手向せむ
われらが戀のおくつきに。

# 印象

明色の聲音
はじける哄笑
あら！　振りむくとたん……
はた、はた、はた、



階段に翻る　蹠
ちらと覗いた雪の素双脚
可　撓な夏の半身！
それつきり……
そしてわたしの長わづらひ。

## 捧誓

つめたき夜風にひたされ
さえかへる星のごとくあれ
わがこゝろよ、忍従のそらに。
さゝぐるおもひを純ならしむるため



きびしき雨に濡らされ
うるほへる白樺のごとくあれ
わがこゝろよ、謙譲の森に。
さゝぐるおもひを靜ならしむるため
泡だつ浪にかたむかされ

帆をあぐる舟のごとくあれ
わがこゝろよ、情熱の海に。
さゝぐるおもひを慕(したし)らならしむるため

——八、一〇、七夜——



## みどり

——Sにおくれる——

きみがめでにしそのみどり
みどりのいろのあたゝかさ

きみといだきしはるのもり
みどりのかげのなつかしさ

はじめてきみがくちびるに
ふれしゆめぢのうすみどり

いまはひとりのよそほひに



みごりのへやもきみまさず

あつきひとみにじみいる
みどりの灯こそかなしけれ

—八、一〇、七—

## 山の驛長

旅の汽車みねを越えきて
ふと停りたり山峽の驛

若き顎もてる驛長がひとり



右手をあげて笛ふきたれば
やがて汽車ははなれぬ
かれの姿はちいさくなりて
帽子のあかき布がみゆ

シグナルの側のコスモス朱し
かれにはかれの戀もあらむ

—1918・8—



## 裏山のおち葉の下に

うらやまのおちばのしたに
きのこがもえる
ひとがつむ　ひとがつむ
しめつぽい

うらやまのおすばのしたに
またもえる
きのこ

## ひそかに見たり

ひと日旅にいでゝ



汽車のうちにゆうべとなりぬ
ほのぐらき灯のもと
疲れたるしゞまの底ひ
ひそかに見たり
もろもろのひとの
もろもろのすがた
汽車は曠野をひたはしれり

## 孤獨

嵐のまなかに、わたしは傘をさす
ふところが　濡れないやうに
傘と帽子を　さらはれないやうに
身をひき緊めて　しつかりと



傘をつぼめて　わたしは歩む

ふかくめりこんだ　わだちの跡
その泥水を　はねかさないやうに
倒れた幹に　躓(つまづ)かないやうに
たしかな地面を　踏みえらんで
しかし、その涯しない一路を

強い歩調で　どこまでもと私はゆく

濕つた裾の　つめたさと
吹かれる袖の　便りないぬくもりとを
涙ぐましく　わたしは感ずる
けれど　何か心いつぱいに充ちわたつて
うなだれがちな　ひとみを睜り



傘の向ふに　はるかの行手をしかと見る
それだ！　孤獨者のおほきな『愛』！

嵐のさなかに　わたしは傘をさす
濡れるものは　しみじみと瞶め
汚れるものは　そのまゝに涙ぐみ
はろばろと　雨の一路を

傘をすぼめて　わたしはあゆむ。

——八、九、一二——



# 故郷に依れる詩篇

罪人(つみびと)と名にも呼ばれむ
罪人と名にも呼ばれむ
歸らじとかれて思へば
嗚呼涙(なみだ)さらば故郷(ふるさと)

——藤　付——

## 空が地上を映すなら

——空を指しつゝ——

もしこの碧空が地上をうつすなら
ああ、彼處！　あそこらに白い象嵌のやうな
貴嬢の面影がきつと！



見まもる私の眸がぬれるなら
しなやかな映像は泣きくづおれて
青みに融けはしないだろうか？
私も泣かないで瞶めよう、そして
「青ぞらよ、いつも澄め鏡のやうに！」と
聲ひくゝ歌ふのだ。

——六・七・一六——